

私と海外訓練

リレートークで宇都さんから紹介を受けた寺田です。宇都さんとはゴルフというスポーツを通じて一緒に腕を磨いている仲間です。以前はスコア的には私の方がよかったです。そのうち彼がレッスンプロのもとで練習し始めると、アツという間に飛距離や安定性が変わってきました。そのうち私も同じ人に指導を受けるようになったのですが、もともとの体力の差で飛距離に関しては、宇都さんを認めざるを得ませんでした。その後、彼が海外勤務となり今度は小技を磨いているということなので、私としてはヒヤヒヤしています。そのあたりの情報についてEメールでやりとりしているという次第です。

さて、宇都さんの前の久米さん、矢吹さんは、大阪職業能力開発短期大学で一緒に仕事をした同僚です。以前のリレートークでは、海外勤務の内容をいろいろと書いておられたのですが、私としては、その経験がなく何について書こうかと悩みました。そこで、海外に関連する訓練のことを少し携わったことがあるので、それについて書いてみようと思います。

まず最初に私が赴任したときに行っていたのが海外移住者訓練で（この訓練の名前を知っている人は少ないかもしれませんが）、当時カナダとオーストラリアだったと思いますが、技術者を養成して移住をさせる。そのような政策でした。しかし、応募者が少なく1職種について2、3人で、かなり充実した訓練を行うことができませんでした。結果、訓練を受けた人たちは、全員移住ができたと思います。しかし、この訓練は2年か3年で国の情勢によって中止となりました。

その後携わった訓練が、カウンターパート（以下「CP」という）の訓練でした。海外移住者訓練のときも同時に実施していたのですが、その後本格的にCPの訓練が行われるようになりました。CPは中南米、アフリカ諸国、東南アジア諸国などから来られており、言葉は英語、スペイン語、フランス語それから筆談（漢字）、ボディーランゲージを使っていました。最初はどうなることかと思っていましたが、技術的な言葉は専門英語で何とか通じ、後は片言の英語でいけるということがわかりました。しかし、こちらの一番伝えなければならない細かいところに関しては、どうしても語学力が必要だとつくづく感じました。

多くの国から来ていたので、彼らの会話は英語、スペイン語、フランス語等で話がされているのですが、その中でわからなくなってくると日本語が共通語としてでてくるといった状態でした。特にアフリカから来ていた人たちは、同じ国なのに地域によって言葉が異なり、また植民地だったこともあり普段は公用語のフランス語で、他の海外生とは英語で会話していました。しかし聞いていると何語で話しているのかわからないといった具合でした。「何語で話しているのか？」と彼らに聞いてみると、「わからない」という答えが返ってきたりもしました。どちらかというと「混在語」らしい。その後このCP訓練は千葉センター中心で実施することとなり、訓練自体から離れることになりました。

以上のように海外訓練生に対する訓練が展開できたことは、私にとって非常に有意義な仕事ができたとと思います。現在ポリテクセンター兵庫でセミナーを中心に業務を行っていますが、そのときの経験が

非常に生かされていると思います。

次回リレートークをお願いしたい人は、以前君津のセンターで一緒に仕事をしていました青木さんを

紹介したいと思います。ジョルダンから帰国してきたばかりなので、新しい海外の情勢を聞かせてもらえると嬉しいです。

それでは、よろしく頼みます。

リレートーク【2】

雇用・能力開発機構 伊勢崎 浩之

21世紀に向けて

「トゥルルー」と電話が鳴り、取ってみると懐かしい声を受話器の向こうから聞こえてくる。同じ大阪出身で共に学生寮で4年間を過ごした岡野氏からである。

話を聞いてみると今回のリレートークの件で「次を頼む」とのことである。

久しぶりに聞く関西人特有のイントネーションに引き込まれ、知らず知らずのうちに関西弁で話していると、横で聞いていた小3の長女から「大阪弁をしゃべっている」との一言。「依頼」については、「断り」を試みるも長女の一言に氣勢をそがれ、私の稚拙な文章が皆さんの目に触れることとなりました。あしからず。

大阪弁を話さなくなると、久しくなる。相手方がいればまだ話せるのだが、こちらから単独で話すには、どことなくテレが入ってしまい遠慮してしまう。今では「大阪出身です」と職場で言うと驚かれてし

まうまでになってしまった。

こんな私も関西エリアでの勤務は京都で2年経験したことがあり、この頃は、幼稚園に通う長男も少しずつ関西弁を使い始め、頼もしく思ったものである。現在は、住まいが横浜となり子どもたちもすっかり関西弁を忘れてしまい寂しいことである。

幸いなことに業務上、全国に電話をかけることが多くあり、マニュアル的な対応の中にも地域独特の言葉の響きがあったときなど業務内容は別とし、楽しいものである。

私の関西弁は、東北出身の妻から言わせると「東北弁まじりの関西弁」とよく言われる。今でもたまに使っているらしく、「どこの言葉」と指摘されてしまう。これは、最初の勤務地である岩手県、釜石での影響が強く、見よう見まねで覚えた東北弁がいつのまにか口になじんだためである。時として家庭不和から勃発するバトルでは、東北弁と東北弁まじりの関西弁が飛び交っている。

さて、11月号が皆さんの手元に届く頃には、紅葉も満開となり、街では21世紀へ向けたカウントダウンなるイベントが数多く企画されている時期だと思われる。

20世紀最後の年である2000年は、シドニーオリンピックが開催され、国勢調査が実施された。次にこの2つが同じ年になるのは、私が定年を迎える年である。その時には、定年祝いと称しオリンピック会場を訪ね日の丸の旗を振り、国勢調査では、住居項目の「持ち家」欄を黒く塗りつぶし、孫たちと関西弁を話したいものだ。

こんな絵空事を考えながらボーとしていると、あ

るポスターが目飛び込んできた。健保連の健康強調月間のポスターで、キャッチコピーは、「人の腹みて、わが腹なおせ」である。目前に迫った21世紀に向けて、今、私がすべき課題はこれに尽きると一人納得した。

今回のトークは、2001年のスタートを飾るにふさわしい人ということで釜石と一緒に仕事をし、現在、高度職業能力開発促進センターで活躍中の平野氏にお願いしております。

「ほな、たのむでー」

